

さくら結びの会によせて

西松布咏

三十年前、初めて異国で演奏したのは小泉八雲「ラ
ファディオハーン」の生誕の地ギリシャのレフカス
島だった。爾来ヨーロッパ各国、アメリカ各地へ三
味線をかかえ未知の可能性を探りながら渡り鳥のよ
うに旅を重ねて行った。遠い昔のことである。

今年はどうのように活動してゆこうか：以前から心
にかかっていた出来事が蘇る。以前から日本各地の
寺院や神社で演奏して来たが、四年前の「アジール
公演」で新潟の角田山妙光寺で遊女の想いを演奏し
始めた私を目掛けて天井から様々な固まりが黒い雨
のように降って来て不覚にも歌詞を失ったことがあつ
た。江戸唄と称して遊女の切ない恋を現代に蘇らせ
たいとの不遜な想いが粉々に砕け自信を喪いかけた
時期があつた。が：ようやく芸を続けてゆくことの
迷いが消え、三味線がなぜ人の心を捉え現在まで累々
と語り継がれて来たのかという縁の糸をたぐり日本
人である我が心の奥深くまで分け入ってみたいと思
うに至った。まずたどり着いたのが昔馴染みの友人
が在家僧侶としてお勤めしているという本郷駒込の
浄土宗・浄心寺だった。

一月十八日前日の大雪で泥濘んだ足下を踏みしめ
意を決して佐藤ご住職をお訪ねした。胸の内をお話
すると静かに頷かれ「判りました。我が寺は桜が自
慢ですから満開の時期にいたしましょう」と受けて

下さった。こうして四月二日【第一回さくら結びの
会・桜に寄せる江戸唄と舞踊】が開催の運びとなつ
た。踊りの花柳千寿文師、司会進行の加藤多貴子氏
は共に地元千駄木出身と縁の糸は瞬く間に繋がって
行った。ご近所の方々と伝統芸能に触れるにはまず
かたちからと着付けられた振り袖姿の子供達も色を
添え、菩薩様が微笑んでおられるかのような本堂は
大入り満員の賑わいとなった。

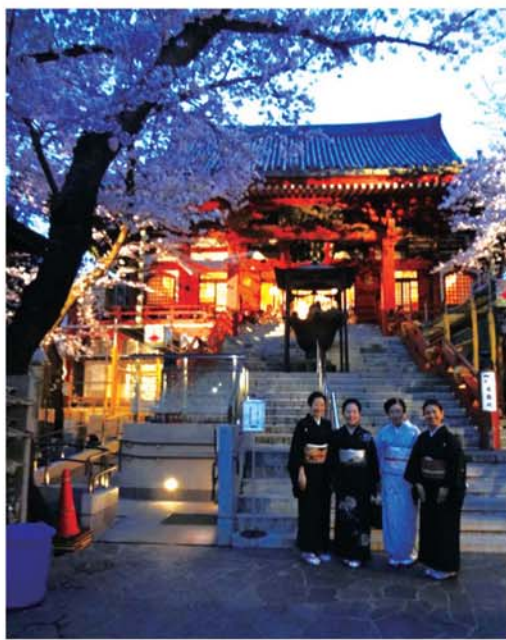


会の初めに下さった佐藤ご住職のお言葉が蘇る。
「毎年桜を観る時皆さんは何を感じますか？ひとり
一人が花の命と自分の命を重ね、生きてあることの
喜びを感じるのではないのでしょうか？今年も又、桜
に逢えたご縁の有り難さを噛みしめていただきたい。
今日はそれにふさわしい【さくら結びの会】を共に
楽しみたいと思います。」と結んで下さった。

縁の糸と言えば昨年末、立川談志と弟子達の熱き
交流を描いたテレビドラマ【赤めだか】を観た友人
の服部上人が「立川談志師匠の墓がうちの寺に立っ
てるよ」と聞いた時は、まさにこの世の縁の不思議
さに感じ入ってしまった。弟子が師匠の前で緊張し
ながら唄うシーンは私が担当し、深夜まで役者に唄

の稽古をつけたこと。その昔銀座の画廊へ自転車
で駆けつけたバンダナを巻いた短パン姿の師匠と藝談
を交わしたり、新潟・岩室にある「談志のたんぼ」
の田植えや刈入れの後の落語の様子や師匠お気に入り
の宿に泊まらせていただいたことなどを懐かしく
思い出し、黒々と燦然と輝く「雲黒斎勝手居士」の
墓前に手を合わせた。

そして五年前、各地の寺で展開した映像とダンス
と江戸唄による【アジール公演】の最初の会場となつ
た京都黒谷永運院は、浄心寺の開祖である法然上人
が比叡山下山後初めて庵を結んだ寺であると知り、
計り知れない見えない糸で結ばれてゆく予感がした。



このように数々の縁に導かれての会は満席となつ
ていったが、はたして桜はその日まで満開でいてく
れるだろうか：日毎に変わってゆく桜たよりを恋に
身を焦がす乙女のように切ない思いで聞く毎日であつ
た。そんな必死の思いが仏様に通じたのか当日は花
冷えではあったが門に入って階段を上がった本堂は
あでやかな桜の雲に包まれた。与謝野晶子の句。夜
桜や今宵逢う人みな美しく：と終演後の花見の宴は

車座にお弁当を揚げ、極楽浄土のような柔らかな香気に満ちての和やかなひとときとなった。

地震や災害に見舞われるたびに人智の及ばない儚い日本を憂いてしまう昨今ではあるが、こうして縁の糸が結ばれたのは周りの方々やご先祖様のお蔭である。次なる結ひの会に結ばれるように常に謙虚な気持ちで縁の糸を大切に、三筋の糸を細く長く紡いでゆきたい。

八年越しの想い

松本 まりあ

はじめまして。松本まりあと申します。高橋幸治さんが教鞭をとる日本大学芸術学部の子です。

実は、入門するよりずっと前に、西松布詠師匠の唄と三味線を聴かせていただいたことがあります。なんとぜひいたくことに、師匠のご厚意で、授業で演奏を聴かせていただいたのです。

照明を落とした教室に師匠が入ると、空気はぴりっとしまり、心地よい緊張感に包まれました。しんと静まり返った部屋に響く糸の音と師匠の声は、芯があるのに艶っぽく、とても官能的でした。初めて触れる音色に胸が高鳴ったことを、今でもはっきり覚えていいます。小柄な師匠からは想像もつかない、目に見えるほどの凄みに圧倒されるばかりで、私はただただ「すごい!!」の言葉しか出ませんでした。

その当時は、私とその門下に入らせていただくとは想像もしていませんでした。ガサツな私が邦楽の世界に相応しいとは思えなかったからです。

大学を卒業してから数年後、もう一度、邦楽の魅力に触れる機会がありました。その頃、古い日本映画にハマリ、特に溝口健二監督作品を手当たり次第

に観ており、監督の作品がキツカケでした。

代表作のひとつ、映画『祇園囃子』は、タイトルから察しがつくように、舞妓の物語です。あどけなさが残る若尾文子と、若くとも貫禄のある木暮実千代の艶やかさが存分に感じられる作品ですが、そこで私の心を捉えて離さなかったのは、作中で随所に響く三味線の音でした。夏が近い祇園の夜は、いたるところのお屋敷でカラツとした三味線の音が洩れ聞こえ、その音はなんとも風流で懐かしいのです。映画の本筋は記憶があやふやですが、影を落とした路地に流れる三味線の音は、思い出すだけで体がしびれるような切なさで襲われます。

たった三本の糸で、心の奥をぐるぐるとかき乱すなんて……。改めて、衝撃を受けました。そして、学生時代に聴いた師匠の演奏を未熟なあまりに圧倒されるばかりだった私のバカ!と自分を激しく責めめました。「いつか私も、木暮実千代に教えを乞う若尾文子のように、弟子になることができれば……」と想いを募らせていたまま年月は流れましたが、昨年の五十回記念パーティーにお呼ばれたことで、今回、思いきって門を叩いてみた次第です。



四月に行われた第五十一回美紗の会のつどいでは、しよっぱなから調子の外れた唄を披露してしまい、恥ずかしさで蒸発してしまいそうでしたが、やさしくて明るく、面倒見がよい先輩たちと、アットホームな雰囲気にとっても救われました。ふだんは師匠と一對一ですが、皆さんとお会いしてお話し、唄と三味線を聴かせていただけて、大変勉強になる貴重な一日となりました。

ガサツなところは学生時代から変わりませんが、先輩たちの背中を見て、早く一人前、いえ半人前になれるようがんばります。これからもよろしく願います!



怪人怪夜

金澤 一志



きょうは弾き語りをします、と壇上で言い放つ高橋悠治に思わず大笑いしてしまった。その十五分前には山下洋輔がピアノから離れて詩を朗読していた。三月八日の夜に新宿ピットインで開かれた奥成達(二〇一五年八月に七十三歳で逝去)の追悼会「Long Good-bye でわ又。」のことである。でわ又。というのは筆マメだった奥成さんがハガキの最後にしたためていた、とりあえずのお別れをしめす一語。

よりにもよって現代音楽のスターが「弾き語り」、フリージャズのスターが「朗読」という破天荒な夜は三上寛や坂田明に引き継がれ、白石かずこや高橋睦郎の朗読の合間にタモリのメッセージが読まれ、藤富保男の声が流れ、ジャズピアノのスター・渋谷毅が締めくくる。高橋悠治と高橋睦郎の顔が似ていたという昔のエピソードはなにかで読んで知っていたが、当のふたりが壇上でそんなはなしをしている光景は幻想的でした。二度とない顔ぶれによる再現不可能な夜のことを思い出してみると、和製アラビアンナイトよろしく蜃気楼に立ち惑わされる。

中盤に登場した西松布咏さんは不在の情を「夢の手枕」にうたい上げ、北園克衛の「黒い肖像」「BLUE」の披露で故人とモダン・ジャズ詩人との交流を思い起こさせる。ことばと音に足をかけていた奥成達という怪人の両界をわたす架け橋のお役目とみえた。

布咏さんがときおり口にする遊女の哀切とは、ブラジルで言うサウダージに近い感情ではないかと思っている。郷愁、哀愁。にぎやかな周囲に反して奥成さんには南米人がときおりみせる寂しさがあった。後ろ姿に粋があった。そしてなほ古い日本人の矜持を持っていた。ノリはラテンでもすぐ横では柳の枝が揺れているのだ。

それにしても詩人、編集者、ライター、トランペッター奏者、役者、などと奥成さんの肩書きは指折っていくだけでもたいへんだ。おまけに赤塚不二夫や上村一夫の設計者でもあったのだから、どれほど交錯する毎日だったことか。ドナルド・オコナーの帽子のようにめまぐるしい様子を想像すると、職業についていたなんなのだろう、と考えさせられる。

会場に集まったのは、各界で奥成さんのおこぼれにあずかっていたひとばかりであろう。だけれど

「ホント、お世話になったんだよなあ」と嘆息し、全員がうなずく。異論があるはずもない、ぼくだってさんざんお世話になった。だがここまで世話してくれたんだから、もっと先まで面倒みてくれてもよかったのに。

達さんは喜んでいとおもうよ、こうしてみんな集まってさ、と孔雀のように豪華な面々は満足げである。ぼくはそう考えられない。やはり隠すことができない喪失感というものがある。自分から破滅していくタイプの知人に囲まれていたにもかかわらず、奥成さんは日常を乱すことがない常識人だった。七十三歳は早い。あなたのような人は死んではいけない。無念である。

いとどしく月も霞まむ春の夜のおぼるけならぬ心惑ひに・本居宣長。

いまや月の人となった奥成さんは、尋常でなく賑やかな地上の夜をいかがご覧する。



ロングなグッドバイの ブルーの夜の ヤリタミサコ

奥成達さん（詩人・ジャズ評論家、稀代の趣味人アーティスト、北園克衛主宰＜OC＞のメンバー）が二〇一五年八月に亡くなり、三月八日に偲ぶ会が新宿ピットインで開催され、多彩な友人たちが入りきらないほど多数集まりました。

山下洋輔さんは、奥成さんの一言で決定したアルバムジャケットを見せてくれて、ピアノを弾いたと思ったら急にマイクを持って、奥成さん作の葉山を題材にした詩を朗読し始めました。ビックリ仰天です！ジャズピアノリストが詩の朗読？前代未聞？トークも愉快でした。奥成さんの誘いで山下家が葉山に移住した数年間のこと、子どもは葉山の小学校に通学したこと、山下さんの愉快な話から葉山の広い空と奥成さんの笑い声が聞こえるようでした。

高橋悠治さんのピアノと弾き語りも、同じくらい衝撃でした。現代音楽のピアノリストが、エリック・サティのジムノペディを弾きながら北園克衛の一九三九年の詩「熱いモノクル」を朗読するのですよ。偏屈で有名なサティと、モダンズムの極北である北園克衛と、唯一無二の高橋悠治の出会い！です。あとで金澤一志さんに聞いたところによると、高橋悠治さんは「まづいピアノをきく」というこの詩のフレーズの「づ」を完璧に発音できるとのこと。「づ」に濁点と「ず」に濁点の発音は、本来は違う音なのです。耳に慣れているはずのジムノペディがまったく異音に聞こえてくるほど、北園の詩との衝突は劇的でした。

第二部の最初に布咏さんがブルーのドレスで登場です。北園克衛の詩に布咏さんが曲をつけた「ブルー」

が唄われるのだなあと思いました。奥成さんは、北園独特の語法である、行の先頭に置かれる「の」音を布咏さんが唄うとき、とても色っぽいとほめていたそうです。確かに「ブルーの風／の／なかに／いて」と改行されるので、ここで「の」は独立した声のトーンになります。同じような行頭の「の」は七か所ありますので、そのたびに独立音の「の」が立ち上がるのです。日本語の「の」の音はアルファベットのNOの音とは違って、鼻音の柔らかさに満ちています。フランス語の鼻母音に似ていて、それが布咏さんの喉から少し高めの音で出てくるのですから、



色っぽいわけです。この「色っぽい」という形容は日本独特の表現で、英語のエロティックの意味とは違います。抑えつつも湧き出てくる女性、それに可愛らしさが加わって、官能性をソフトに醸し出すのでしょう。

そしてこの日特に印象深く感じたのは、「ブルーの長い影を曳き」「海のブルーを見ている人の細い背中もブルーである」というフレーズです。昨夏に去って行った奥成さんの影と背中のように思えました。布咏さんもきっと心の中に奥成さんの姿を想像しながら、唄われたのだと思います。決して湿っぽくはないのですが、遠くへ去りゆく人に対して手を伸ばしても届かない、そんな気持ちになりました。

また「黒い肖像」という詩／曲は「絶望／の／火酒／の／紫／の／髭」という抽象的表現から始まるのですが、布咏さんの三味線は強いリズムを刻みながら、ドラマティックな物語のように盛り上がっていきます。この曲での「の」はゆらぐ音として表現され、「ブルー」とはまた違うニュアンスです。北園の「の」は、貼って剥がせる付箋紙機能だというのが私の自説ですが、布咏さんの「の」の音は、言葉や空間をつなぐと同時に離れるかのような、音程を下げるアクトバティック的に聞こえる唄い方。「孤独／は／黒／い／雨／に濡れ」という謎めいたフレーズは、布咏さんの陰影のある声の表現によって、より一層深い色合いに感じられます。揺らめく黒が濡れて、黒の深みが増す、その色味が声から感じられます。

奥成さんの代表作の「帽子の海」は、坂田明さんと福原千鶴さんがパフォーマンズされました。あまりの奇天烈ぶりに「ねえ奥成さん、すごい傑作だね」と会場中の誰もが、作者奥成達に語りかけたことでしょう。また、タモリさんからの万年筆直筆お

手紙まで披露されました。その心のこもった文には、一同、ぐっときました。他には白石かずこさんやケン・サンダースさんが出演し、ここに奥成さんだけがいないのが不思議、といった集会でした。いえ、みんなの心の中に奥成さんは、ちゃんといました。

第一回さくら結ひの会

己紗 佳咏

布咏師匠、花柳千壽文先生、加藤多貴子プロデューサーという最強タッグ、桜満開の浄心寺で江戸唄と舞踊の会が開かれるという。『第一回さくら結ひの会』ネーミングが可愛らしい。第一回ということは二回、三回とシリーズへの期待がふくらむ。――二月のお稽古で師匠のお机の上、桜色のちらしが目に止まり、情報を眺め見て頭を駆けめぐったことである。「万障お繰り合わせしても行く！」そのとき春がやって来た。

グラフィックデザインの国際コンペを運営してから、毎年四月は海外から複数のお客様を授賞式に招く。「何もありませんがせめて日本の桜を」と海の向こうへメールを送る。だから桜と聞くだけで重圧、緊張が走るようになった。それが今年は六月の開催となり、桜を春うらら今年この手にいかに取り戻すか詰っていた最中のこと。あまりにうれしくて、神様、いや仏様と手をあわせた。

浄心寺に行きますと、それは阿弥陀如来のお姿になり、その右には江戸観音札所の第十番「子育て桜観音」と知られる十一面観世音菩薩、左に勢至菩薩演奏会の座席の眼前に拝めるとは。この場所で千壽文先生が舞われる。師匠はときには目を閉じながら、江戸の女にチャンネルをあわせるのだらう。想像を

超えた景色、アングルは鼻根のミュージシャンのライブ、アリーナ前列に突然押し出されたような夢見心地でくらくらした。それでなくとも、桜のアーチをくぐった所でくるくると回りたい衝動にかられ、お釈迦様に甘茶をおかけした時には魂はブツダガヤまで飛んで、自分が何処にいるのか一瞬わからなくなった。大げさだと思うがそのような、何者かにつままれているようなマジカルな何かがあった。ん、化身？

加藤さんの驚のように澄んだお声がお堂に響く。ご住職のあたたかいご挨拶。良きご縁、イメージの桜色の水引が結ばれた。はじまりは上方唄『七福神』、千壽文先生の舞のご奉納。七福神を見事に踊り分けられている。「ホホホッホッホー笑う門に福来る。」布咏師匠の喉が具合がいい（となるようご調整なさっている。それでも天の誰かの機嫌が悪く、道を極めるものに果てのない試練をお与えになることがあると聞く。）。

千壽文先生はこのあと、小唄『日吉さん』、そして締めくくりの二曲、小唄『夜桜や』『笠森おせん』を舞われた。江戸の娘さんのはじらい。愛おしくて、奇麗で奇麗で、江戸に生きていたらそっこんで入れあげていた。危ない、危ない。終わって「お奇麗です！」とお伝えしたら、「見ないで」と可愛い小さいお声でおっしゃった。

布咏師匠がご用意されたその他の曲。端唄『花は上野』『宇治茶』、小唄『野ざらし』、新内小唄『夢の柳橋』、小唄『この先に』『春風さんや』、創作曲『束の間に』、小唄『薄雲太夫』『一日を』、新内小唄『籠るべ』。欲張りすぎたと後日おっしゃった。様々な感謝のお気持ちゆえだらう。一つ一つご自身の解釈にこだわって仕上げる。それを全身に入れる。その解釈は年月でまた変わる。曲の合間に入れる解説

も内容の良さに加え、唄うように澁みない。十何年稽古いただいても、ご準備の質は今もって想像するばかりである。「新しい年は江戸の女に還って無限の天空に唄いたい。」年頭の想いをこの日に見せていただいた。千壽文先生も布咏師匠もお名前が仮の姿なのかもしれない。春の宵にみた夢だった。



江戸唄の”誘惑“

森 史郎

四月九日、「おおさこ・江戸唄と酒のつどい」の日、東京の桜はもう終わるころだった。外濠沿いに市ヶ谷から飯田橋まで歩き、水に落ちた花びらがいるんな形を作ってゆっくり揺れるのを見る。花筏なんていう美しい言葉が柄にもなく口から出た。はたしてプログラムはほとんどが桜の唄、花の浮かれを三味線の哀調が限り、男と女の情念の纏れを花に言寄せて執念くうたう。散り果ての宵、ちよつとヤバイと思った。

一回目は二〇一二年の七月一日だった。古い手帳を繰ってみたのだが、古本屋で手に入れた樋口寛『三絃の誘惑』で、『いき』の構造の九鬼周造が「小唄のレコード」という大変印象的な一文を残していることを知ったようだ。数日後に同文を収めた岩波文庫を買って読んでいる。そんな経緯がなかったら、大迫さん御夫妻のお誘いに心が動くこともなかったろう。そもそも江戸音曲について何の素養も知識もなかったし、纏い付くように粘っこい独特の情感に嫌悪を感じていたのも事実である。西松布咏さんの唄と三味線に初めて触れたのも、九鬼がいったいどんな音とことばを聴いたのかという、知的と言えはかっこいいが要するに面白半分の好奇心からだった。

「小唄のレコード」はお読みになった方も多からう。昭和十六年秋、林芙美子、成瀬無極（ドイツ文学者）、九鬼の三人が、林が好きだということで小唄のレコードを聴く。「聴いているとなんにもどうでもかまわないという気になってしまふ」という林の言葉に二人は心の底から共鳴する。「男がつい口に出して言

わないことを林さんが正直に言ってくれたのだ」。

短い文章は「私は端唄や小唄を聴いていると、自分に属して価値あるように思われていたあれだのこれだのを悉く失つてもいさかも惜しくないという気持ちになる。ただ情感の世界にだけ住みたいという気持ちになる」と結ばれている。

この日お酒のまわったカウンターで、この随筆のことを臆面もなく布咏師に喋った。無論師は御存知だった。酔っ払いはいつも後から恥じる。頭は言葉の意味を解析して組み直し、再び言葉にしようとする。耳は言葉も音も一緒に導き入れ、抑揚や響きは体の奥へ滲み透る。そんなことを考えていた。九鬼の「自分に属して価値あるもの」とは、ベルグソンやハイデガーに接して築いた哲学の世界、分析や抽象という理知の営みだったろう。三味線の音色があれば、その全てを失つてもいい。樋口は「日本的情感の極北」と書いている。

例えば見知らぬ酒場で一人で飲んでいる時、後生大事に抱えてきたあれこれがどうでもいいことのように思えてくる瞬間がある。「向こう側」に引っぱられるみたい——。絃の磁力も同じなのだろうか、あやしい誘惑である。



《今後の予定》

◎六月十七日(金) 七時開演

紀尾井ホール

閑崎流舞の会

茶音頭 愚痴 八島

舞 閑崎ひさ女 閑崎扇ひで

唄・三絃 西松布咏

尺八 善養寺恵介

琴 己紗咏花

◎九月二日(金)

人形町 登録有形文化財よし梅芳町亭

粋と艶に酔ふ江戸唄の会

唄・三味線 西松布咏

第一部 一時開場 二時開演

第二部 四時開場 五時開演

六時より御食事付き

◎九月十八日(日) 三時より

岐阜 かわらや大広間

第十八回 粋艶会のつどい

一門の演奏会と親睦の宴

■たより 第83号

発行者 美紗の会

編集責任者 大久保 朋子

デザイン 近藤 幹則

■美紗の会

主宰 西松 布咏

稽古場 港区白金台三ー二

白金台プレイス三階

電話 (二四四一) 二七二六

(五四四七) 二四一一

E-mail: nfue@soleil.ocn.ne.jp

URL: <http://www.misanokai.com/>

●お知らせ ホームページのURLが右記に変わりました